

アレグザンダ・ベインの感情論の構成

本 間 栄 男

アレグザンダ・ベイン (Alexander Bain, 1818-1903) は心理学史上では連合主義心理学者の一例として知られてきた。ベインについての歴史的研究はそれほど多いものではなく、その大部分はベインの生理学的心理学や知性に関する連合主義心理学に注目するものが多かった¹⁾。それに比べてベイン心理学の感情部分についてはほとんど研究されておらず、ようやく21世紀に入って一部の研究者が扱っただけである (Dixon 1999; Dixon 2001; Dixon 2003: Chap. 5)。本論文は、ベインの感情論をより詳しく扱うための準備段階として、その構成を検討し、それがベイン以前の感情論とどのように異なっているのかを知ること、その独自性を評価することを目的とする。

第1節 アレグザンダ・ベインの略伝と『感情と意志』

ベインの伝記としては、『自伝』(Bain 1904) が最大の情報源だが、大学教授就任までの前半生を扱ったフリーシャの博士論文 (Flesher 1986) が研究として最も重要であり、羽生による後半生のまとめ論文 (Habu 2002) も参考になる。それらを参考にしてベインの生涯を概観しよう。

アレグザンダ・ベインはスコットランドのアバディーンに織物職人の息

* 本学社会学部

キーワード：アレグザンダ・ベイン (Alexander Bain), 感情, 19世紀イギリス心理学, 19世紀スコットランド思想史, 心理学史

子として生まれた。産業革命の進行で家族は徐々に貧困化したため、初等教育は受けたもののその後は仕事の後に私塾的な場所で学ぶだけだった。その間の主な関心は数学と数学的諸学にあった。その時代の教師に推薦されて18歳でアバディーン大学に入学（当時の平均よりは年上だった）、かなり優秀な成績で卒業した。大学時代に広範囲な（今で言う文系の）学問に関心を持つようになった。一時的に同大学の道德哲学の助手を務めるも、大学に職を得ることは困難であった。それは、バインの宗教的理由（いかなる宗教セクトにも不参加だったため）とおそらくは出身身分も関連していたからであろう。その間に、文筆活動を通じて、J. S. ミル（John Stuart Mill, 1806-1873）などのイングランドの社会改革派グループとつながりを持ち、様々な分野に関心を広げていった。そして、旧来の人間の心についての学問を自然科学に根付いた科学にすべく書かれた著作『感覚と知性』を1855年に出版（Bain 1855）、その続編で完結編『感情と意志』を1859年に出版した（Bain 1859）。後者の成功により名声を得て、実に20年に及ぶ就職活動が実り1860年にアバディーン大学論理学教授に就任、1880年までその職に留まった。

論理学教授の兼任として作文を受け持っていたこともあり、作文とレトリックに関する著作、教育に関する著作も記したが、主要な著作は心の科学2部作であり、その学生向け縮約版『心と道德の科学』（Bain 1868、この著作は『心の科学』『道德の科学』に分けられて出版されることもあった）と共に版を重ねた。心の科学2部作はそれぞれ4回ずつ版を重ねている。晩年は自伝を描き、1890年までの部分を生前に完成させていた。バインの死後、弟子によって1890年以降の部分が補足されて1904年に出版されている（Bain 1904）²⁾。

バインの著作のいくつかは明治期に翻訳され、日本の初期心理学の形成に重要な役割を果たした。本論文ではこの点に関しては論じない³⁾。

本論文で扱われる『感覚と知性』は1855年の初版以来、第2版1864年、第3版1868年、第4版1894年⁴⁾と4回改版されている。そして、『感情と意志』は1859年の初版以来、第2版1865年、第3版1875年、第4版1899年と4回改版されている。ただし、1896年に大きな病気を経験したため体力が急激に落ちたベインは『感情と意志』第4版で計画していた大幅な改訂を見送らざるをえず、結局第3版の本文を全く変更せずに、新たな序文2頁と参照すべき論文のリスト1頁を加えただけで第4版として出版した。したがって、本論文では『感情と意志』の最初の3つの版だけの構成を比較することになる。

『感情と意志』は、感情を扱う前半（これを感情論と呼ぶことにする）と意志及びそれに関連する事項を扱う後半に大きく分割される。量的にはほぼ半々になる。

第2節 ベインの心理学史上での評価

西洋では心理学教育のために心理学通史の教科書が毎年のように刊行されている。近年出版された英文の心理学通史書でのベインの扱いを見てみよう。2012年に第4版が出たC. ジェイムズ・グドウィンの『現代心理学史』（初版は1998年）では全く言及されていない（Goodwin 2012）。2012年に出たマン・チェン・チャンとマイクル・E. ハイランドの『心理学の歴史と哲学』にもない（Chung & Hyland 2012）。2010年に第3版が出たジョン・G. ベンジャフィールドの『心理学史』（初版は1996）にもない（Benjafield 2010）。2010年に出たワイド・E. ピクルンとアレグザンドラ・ラザフォードによる『文脈における現代心理学史』にもない（Pickren & Rutherford 2010）。2009年に出たジョン・D. グリーンウডの『心理学概念史』にもない（Greenwood 2009）。2011年に出版されたエリク・シリャーエフの『心理学史 世界史的観点』では学術雑誌 *Mind* の創刊者、フロイ

トにアイデアを提供した人物としてのみ描かれるだけである（Shiraev 2011: 289）。日本語で書かれた今日もっとも教科書的な（放送大学のテキスト）心理学史書である西川泰夫・高砂美樹の『改訂版 心理学史』には 8 行 1 段落の記述が見える（西川・高砂 2010: 19）。

その一方で、1983年に初版が出たデイヴィッド・J. マリの『西洋心理学史』（1988年に第2版が出た）では、生涯の略記と共に『感覚と知性』『感情と意志』の両著作が「英語で書かれた最初の一般的に受け入れられた心理学の教科書」と評価されている（Murray 1983: 120）。1980年に出版された T. H. リーヒーの『心理学史 心理学的思想の主要な潮流』では、邦訳 2 頁弱の紹介があり（Leahey 1980: 邦訳241-243頁）、「今日でも、たいてい一般心理学の教科書は、バインの考え方と同じ体制をとり、まず、最初に、感覚神経の簡単な機能から始めて、思考や社会的関係へと進んでゆくようになっている」と評価されている（Leahey 1980: 邦訳242頁）。1968年に出版したロバート・トムソンの『ペリカン心理学史』では、邦訳 3 頁わたる紹介があり、「『感覚と知性』『感情と意志』という」二大著作はイギリスの哲学的心理学の最高峰である」（Thomson 1968: 邦訳18頁）と評価している。1933年に出た J. C. フリュージェルの『心理学の百年1833-1933』では、バインは「粘り強いが独創性に欠く」研究者だが「現代的やり方で書かれた最初の心理学教科書の著者」と評価される（Flugel & West 1964: 65-66）。日本では今田恵の『心理学史』に 1 頁強の紹介があり（今田 1962: 167-169）、「その創意性による貢献よりも、体系化による功績の故に歴史的価値がある」と評価している（今田 1962: 168）⁵⁾。1937年に出た野島忠太郎の『心理学発達史』では 1 頁ほどの紹介があり（野島 1937: 88-89）、「独創的な点は少ないが当時までに知られた諸事実で種々の科学に散在してゐたものを集めて精神の説明に持つて来た。……今日の心理学の内容をなしてゐる大部分の材料を集めた折衷家である」（野島 1937: 89）と

評している⁶⁾。同じく1937年に出た松本亦太郎の『心理学史』では感情心理学に関する貢献で数行があるだけにすぎない（松本 1937: 175）。

総じて、20世紀に書かれた心理学史ではまだベインの業績が記憶に留められているのに対し、21世紀に入ってから「現代心理学」ではベインは無視される傾向にある、と言える。アメリカの心理学者・哲学者ウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842-1910）に関して、心理学史書での扱いを比較した研究はある（藤波 2009）が、心理学史書の性格や心理学史というものの傾向の変化を測定するためにはメジャーな人物の扱いよりも、当落線上にいる人物の扱いに注目する方が良い（もちろん、上記の心理学史書にはもちろんウィリアム・ジェイムズの記述はある）。これは今後の課題である。

ともかく、ベインを評価する心理学史書でも、その評価は偏っている。独創性・創意性の無さの指摘はいかにも歴史の専門家ではない人にありがちだが、そういった独創性信仰という歴史記述の問題はここでは問わない。ベインの著作が、後の心理学書の構成の規範となった、という評価を取り上げよう。ベインの2冊の心理学書はそれぞれ2つずつ、計4つの大きなテーマ、即ち感覚・知性・感情・意志を扱っている。イギリスの歴史家トマス・ディクソンによると、この形式はベインに続く心理学書を書いた、マコシ（James McCosh, 1811-1894）⁷⁾、サリ（James Sully, 1842-1923）⁸⁾、ボルドウィン（James Mark Baldwin, 1861-1934）⁹⁾にも踏襲されたという（Dixon 2003: 228）。この後の歴史的変遷に関してはここでは触れないが、最新の日本の心理学教科書を見てみると、その第II部「こころの働き」では、第4章「記憶・学習」、第5章「感覚・知覚」、第6章「思考・言語」、第7章「動機づけ・情動」、第8章「個人差」、第9章「社会行動」、という順番になっている（鹿取 他 2011）。第5章が感覚、第4章と第6章がベインの言う知性に相当し、第7章が感情と意志に相当する。記憶と学習

に関する部分を除いて、ほぼバインの構成の痕跡を残しているといえるだろう。

上記のどの心理学史書も指摘していないが、バイン心理学が後世に影響を与えたという評価を最も高めるのは、バインの著作がわずかな遅れで日本語に翻訳されたことである。1882年（明治15年）に抄訳で出版された『倍因氏心理新説』（倍因＝バイン）によって、バインの見解は西洋の枠を超えて影響力を持つことになったのである¹⁰⁾。学問史を世界史的に描く場合、このことは重要な意味を持つ。

第3節 バイン感情論の心理学史上での評価

上で、バイン心理学書は後の心理学書の構成の規範となった、と評価されたのを見た。では、バイン感情論は感情科学史ではどのように評価されているのか。

残念ながら感情科学に関する通史は数少なく、私が確認できた限りでは1937年に出たアメリカのハリ・ノーマン・ガーディナによるもの（Gardiner et al. 1937）と、2009年に出たカナダの認知科学者キース・オートリのもの（Oatley 2009）しか見出せなかった。このうち、オートリのものにバインに関する記述はない。ガーディナの著作ではバインは連合主義者の1人として扱われ（この扱いは正当である）、学説を邦訳1頁（Gardiner et al. 1937：邦訳249-250頁）ほどに要約しているに過ぎず、後への影響や評価といったものはない。前述のように一般的な心理学史の中で感情心理学を扱った松本はこう言う「英吉利は従来知的重視の連想心理学 [=連合主義心理学] の本場であつたが、バイン（Bain）に至り感情的方面に注意し始めた」（松本 1937: 175）。

連合主義心理学の歴史を扱ったワレンの『連合主義心理学史』（1921）では、もちろんバインはしかるべき検討を加えられ十分に紹介されている

が、ペイン感情論を松本のように評価はしない (Warren 1921)。それは、ワレンの見解によると、既に感情を扱った連合主義者がいたからである。それはワレンの考える「連合主義」の広さにも起因している。アリストテレスもデカルトも連合主義的な議論を使っていたのだから！ 確かに、連合主義心理学は主に心の知的な機能に関して議論を重ねていたが、感情に触れないこともなかったのである。以下では、ペイン感情論の構成をペインに繋がるそれ以前の感情論との比較で検討し、その独自性を探っていこう。

第4節 用語に関する予備的考察

その前に、用語に関する注意が必要となる。複数の論者を横断して感情を巡る議論の歴史を辿る際に、最も注意しなければならないのは用語である。使われる用語は、(1) 日常語か専門用語か、(2) 心理学か哲学か宗教か医学・生理学か、(3) その分野のなかのどの派閥の使う用語か、(4) どの国の言葉か、によって微妙にニュアンスを変え、統一しにくい。

(1) について。この論文では「感情」という用語を、日常語と専門用語を繋ぐ言葉として使用する。我々が日々感じている怒りや悲しみは「感情」であり、科学的にもそれを一般的に「感情」と呼ぶ（このとき「怒り」や「悲しみ」は感情の品目（英語で *repertory*）と呼ぶ）。対応する英語は *emotion* である。この対応は21世紀初頭日本の学術世界でも異常ではない。たとえば、1992年に設立された日本感情心理学会は英語名称を *Japan Society for Research on Emotions* という¹⁰⁾。ここでは「感情」と複数形の *emotions* が対応している。英語使用世界でも *emotion* が日常語と専門用語を繋ぐ役割を果たしていることは、たとえば感情に関する英文学術雑誌が *Emotion* (2001年創刊, APA), *Cognition & Emotion* (1987年創刊, Psychology Press), *Motivation and Emotion* (1977年創刊, Springer),

Emotion Review (2009年創刊, Sage) などと emotion を表題に含んでいることからわかる。

英語の emotion を「情動」と訳すのは専門的である。「情動」という用語がいつごろから日本語の専門用語として使われたのかを私はまだ知らないが、日常語として定着していないことは確かだろう。前述の日本語の心理学史書でも emotion を「情動」と訳したものがあるが、この対応が19世紀中頃のイギリスで成立しうるかは確信がないので、ベインの著作 *The emotion and the will* は『感情と意志』と訳するのが妥当と私は判断した。

また、「感情」を形容詞的に使う際に、対応する英語として affective が用いられる場合がある。英文学術雑誌でも *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience* (2001年創刊, Springer), *Social Cognitive and Affective Neuroscience* (2006年創刊, Oxford University Press), *Journal of Affective Disorders* (1979年創刊, Elsevier) などがある。日本語の「感情的」も英語の emotional も日常語のニュアンスが強いからだろうか。形容詞 affective に対応する名詞 affection, 動詞 affect があるが、これらは19世紀イギリスでは今日とは違う意味を含んでいた。すなわち、歴史的な用法があるので、無用な混乱を避けるために歴史分析の際の用語としては採用しない。

古代キリスト教以来の伝統的な用法では、affection は passion と対になる用語として使用されていた。両方とも、古代ギリシャの哲学まで遡る魂(英語では soul) に結びつく用語である。すなわち近代心理学が扱う精神(mind) に結びつくものではない。伝統的に魂は、上位の理性的部分、下位の動物的部分(この中には肉体を維持する原因も含まれる)の2つに分けられる。理性的部分の能動的働きが affection であり、道德感などが含まれる。それに対して魂の動物的部分の働きあるいは外から肉体への働きかけの結果生じるのが(上位の魂にとっては受動であるので) passion であり、身体的欲求(appetite)や快苦と共に「悲しみ」「怒り」などの品目

はこちらに入る (Dixon 2003: Chap. 2)。能動的なものは良く、魂の理性的部分が担うにふさわしいものが affection, 受動的なものは望ましくなく、魂をかき乱すものが passion である¹²⁾。このため、しばしば誤解されてしまうのだが、passion をすなわち今日の意味での「感情」と考えてしまうと妥当な歴史理解を得ることが難しくなる (Dixon 2003)。本論文では区別のためにあえて日本語を対応させずカタカナで「アフエクション」「パッション」と表記する。歴史上の用語として passion を「情念」と訳す場合があるが (たとえば、デカルト (René Descartes, 1596-1650) の『靈魂のパッションについて (*Les passions de l'ame*)』(1649) は通常『情念論』と訳される), この訳語に単なる対応以上の意味を持たせるなら危険である。そのため、本論文では使用しない。

そして emotion という英語自体も、19世紀に特殊な意味を持って生まれ変わった用語である。18世紀の「感情」に関する議論は passion と affection で語られていた。新たに登場した emotion は、一定のイデオロギーを含意していた。それは、脱キリスト教な含意である。ディクスンによると、passion と affection がキリスト教の伝統の中で使われた用語であるのに対し、emotion は世俗化＝脱キリスト教化された感情研究の目印として19世紀に使われ始めたのだという (Dixon 2003: Chap. 1)。本論文では、この歴史的用法に注意を払いつつ、歴史分析の用語として emotion と「感情」を対応させて使うことにする。

また、感情としばしば訳される英語に feeling がある。矢田部達郎によるワレンとガーディナの著作の翻訳では、feeling の訳語として「感情」が採用されている (Warren 1922; Gardiner et al. 1937, それぞれの訳書)。確かに、emotion と feeling の使い分けはかなり微妙な問題を孕んでいる。ペインの場合でも、この emotion と feeling の関係は簡単ではない。その詳しい相違は別論に譲るとして、本論文では、この2つの英語用語を訳し

分けることにする。井上哲次郎（1856-1944）はベインの抄訳書¹³⁾で feeling に「感応」という語を対応させている。これは、井上が抄訳書の前年に出版した『哲学字彙』（1881＝明治14年）で「Feeling 感応」としていることの適用である（井上 1881: 35）。3年後の増補改訂版でもこの点は変更無い（井上・有賀 1884: 46）。「感応」はもともと仏教用語であり、他者との共感に近い意味合いがあるのであまり妥当とは言えない。本論文ではいささか稚拙な感は拭えないが「感じる＝feel」という動詞の名詞化として「感じ」という語を仮に採用する¹⁴⁾。ちなみに井上は emotion に対して「情緒」を当てている（井上 1881: 29；井上・有賀 1884: 38）。

もうひとつ、感情と訳されることのある英語に sentiment がある。アダム・スミス（Adam Smith, 1723-1790）の *The theory of moral sentiments* は水田洋によって『道徳感情論』と訳されている（岩波書店 2003年）。同じ著作に米林富男は『道徳情操論』という訳を与えている（日光書院 1948-1949年）、すなわち sentiment に「情操」を対応させている。本論文では emotion に「感情」を対応させるので、sentiment には使わない。本論文では、余計な日本的意味の伴う訳語を用いずに「センチメント」とカタカナのままにしておく。

（2）について。感情論は多くの場合、複数の学問分野が絡まり合う地点で議論となる。この論文では、それぞれの伝統に注意は払いつつ、専門用語にはただ一つの訳語を与えることにする。

（3）について。これも（2）と同様に、それぞれの派閥での使い方を注意しながら、同一の用語で対応する。

（4）について。本論文では主に英語圏の著作に集中するので他の西洋諸語との関連は少ないが、日本人が日本語で書いているという点で重大な問題を引き起こす。英語の専門用語に対しては日本語の用語を一对一対応させて、曖昧さを避けることはできる。より重大なのは、感情の品目（レ

パートリー) についての問題である。

色を例にとろう。色のクオリアは実在ではない。それは個人毎に異なるかもしれないが、生物として全てのヒトは同じ種類なので、色の認識もほぼ同じと考えられる。ただ、色の品目の名称は各言語によって異なり、その名称で示される色の範囲（色はスペクトルなので連続的に変化する）も各言語で微妙に異なるだろう。各言語とその背景にある文化に根ざした微妙な色の名称（萌葱色とか一斤染色とか）は他言語に訳しようがない。もちろん、色にはカテゴリーと典型色・代表色があり、比較的正確に相互比較は可能である。

感情の品目についても色と同様のことが言えるし、言えないところもある。生物としてのヒトは同じような感情を抱けるかもしれない。しかし、言語によって各品目に与えられる名称は当然異なり、その内実も微妙に異なるだろう。色との違いは、色はスペクトルとして連続でありながら、各言語でカテゴリー分けできて典型例を提示できる（光の波長によって数値で示せる）が、感情は複数次元のスペクトルで示されるのかカテゴリーなのかで論争は未決着であり、それ自体が感情論の大きなテーマの1つとなっている。それでも、一般的には品目としてカテゴリー的なものがあることは認められていて、大まかに翻訳可能である（anger は「怒り」に対応する）。そして色同様、文化に根ざした微妙な感情の名称とその相違（たとえば anger と rage と fury と wrath）は他言語に訳しようがない。この場合、本論文では、仮に対応する日本語を当てて原語を併記する。

その他、日英の用語の対応に関しては、必要があればその都度論じることとする。

第5節 ベインによる心の三分割について

ベインが心理学書をこれら3つのテーマに分けた理由は、『感覚と知性』

の最初に書かれている (Bain 1855: 7)。ベインは心を定義する際に、内包的定義ができないので、心の諸力を枚挙する、すなわち外延的定義を与える、と宣言する。その際にまず、先行する研究者たち、特にスコットランドのコモンセンス学派のトマス・リード (Thomas Reid, 1710-1796)、トマス・ブラウン (Thomas Brown, 1778-1820)、ウィリアム・ハミルトン卿 (Sir William Hamilton, 1788-1856) の見解を紹介して、心を知性 (あるいは悟性) と意志に分けるという古い二分法から徐々に、知性・感じ・意志という三分法に移行していくことを記述する。その一方で、ドイツの心理学でもこの三分法が行われていたことも (初版においては) 間接的に知っていた。版を重ねるにつれ、ドイツ心理学の研究が進んだようで、徐々にドイツ心理学での心の三分法をより詳しく記述するようになっていく (Bain 1864: 7; Bain 1868: 669-671; Bain 1902: 647-654)¹⁵⁾。第2版でベインは言う、「ヴォルフとカントの間に栄えたほとんど忘れられた心理学者たちによって、心の三分割 (感じ・知性・意志) は前世紀 [18世紀] ドイツで最初にはっきりと作られた」 (Bain 1868: 669)¹⁶⁾。カントの三批判書が知性・意志・感じに対応しているというほど、カントの時代には既に一般化していたのである。初版に戻ると、ドイツ心理学への簡単な言及の後に、アイルランドの解剖学者ジョーンズ・クワン (Jones Quain, 1796-1865) の解剖学書を拡張した『クワンの基礎解剖学 第5版』(1848) に書かれたスコットランド人解剖生理学者ウィリアム・シャーピ (William Sharpey, 1802-1880) による増補部分の一節を引用し¹⁷⁾、それに基づいて、感覚・知性・感情・意志作用 (Sensation, Intellect, Emotion, and Volition) の四分割をベインは提唱している (Bain 1855: 8; Quain 1848: clxxxvi)。ベインの心理学書の構成はこの四分割に従っている。しかし、ベインはこれら4つのうち感覚と感情をまとめて「感じ (Feeling)」としていた (Bain 1855: 1) ので、結果、感じ・知性・意志という三分割に落ち着くのであ

る。初版でのベインの記述の意図は、自らがスコットランドの「心理学」の伝統の中にいることを明白に宣言しつつ、思弁哲学のみでなく生理学（これもスコットランド人の業績をわざわざ引用する）からも知識を得たことを明らかにして、新たな（スコットランド的）生理学的心理学を構築しているのだ、と表明することであった。

ベインの三分割は日本語で「知情意」とまとめられ、心の働きの品目を大まかに表す際に日常的に使われている。夏目漱石（1867-1916）の『草枕』（1906）冒頭の「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」が知情意の順番になっていることはよく知られている¹⁸⁾。この日本語として定着している「知情意」は、おそらくベインの心理学書を抄訳した先述の井上哲次郎に由来するのだろう。ベインの三分割は心の働きの品目を挙げたのであって、これらが平等に心を三分割しているということではない。まして、それらのバランスが良くあるべき、などということはベインの意図ではない。この曲解もおそらく井上哲次郎に由来するのだろう。

第6節 ベイン以前の感情論の構成

第2節で挙げた様々な心理学史書から、ベインが連合主義心理学の伝統にいて、ということがわかる。ワレンは、連合主義心理学をアリストテレスまで遡らせているが、通常はトマス・ホッブズとジョン・ロックを起点とし、心理学として充分展開したのがデイヴィッド・ハートリ、トマス・ブラウン、ジェイムズ・ミル、そしてベインという流れになる（Warren 1921）。まずこの順番にそれぞれの感情を扱った著作中での感情論の構成を見ていこう¹⁹⁾。

第1項 デイヴィッド・ハートリ

イングランドの哲学者デイヴィッド・ハートリ (David Hartley, 1705-1757) の『人間の観察』(初版1749年, 以下で参照するのは全て第1巻) では (Hartley 1749), その索引に emotion の項目はないが, emotion という語は現れている。しかし, emotion を独立して扱う節はない。他方, feeling に関する項目はある (Chap. II, Sect. I. Of the Sense of Feeling) が, これは触覚を扱っている。そして affection には対応する節がある (Chap. III. Containing a particular Application of the foregoing Theory to the Phaenomena of Ideas, or of Understanding, Affection, Memory, and Imagination. Sect. III. Of the Affections in general)。セクションの表題に「アフエクシオン」とあるものの, そこで扱われる命題89は「パッション一般の起源と本性を説明する」とあり, 本質的にはパッション論である。ハートリにとってアフエクシオンは, 想像力・自己顕示・自己関心・同感・神愛・道徳感覚 (Imagination, Ambition, Self-interest, Sympathy, Theopathy, and the Moral Sense) であり, これらは第4章 (Chap. IV. Of the Six Classes of intellectual Pleasures) で順番に扱われる。これら6つは感覚の連合によって生じる想像からはじまる系列であり, 感覚と想像力の連合によって自己顕示が, 感覚と想像力と自己顕示の連合で自己関心が, というように系列上の以前のもの全てと感覚との連合によって系列の以後のものが作り上げられる, という形になっている。他方, パッションは連合主義心理学の前提に従って快苦 (Pleasure and Pain) の原理から分割される。快を求めることが愛 (Love), 苦を避けるのが憎 (Hatred) で, 愛憎が引き起こす活動 (Action) がそれぞれ欲 (Desire) と避 (Aversion), その活動に伴うものとして望 (Hope) と恐 (Fear) があり, 欲避の活動の帰結としてそれぞれ喜 (Joy) と嘆 (Grief) があり, 過去の喜嘆はそれぞれの回想 (Recollection) となる。つまりパッションには快苦それぞれに5つの系列

(愛・欲・望・喜・その回想, 憎・避・恐・嘆・その回想), つまり10品目があることになる (Hartley 1749: 368-373)。パッション論が6頁ほど(その中にアフェクション一般論も含む)であるのに対し, アフェクション論が第1巻の全4章のうちの1つの章を割いて論じられているところが, ハートリの関心のありかを示しており, 連合主義心理学が感情の問題と無縁でないこと, アフェクションとしての感情論が道徳倫理と繋がっているという伝統も明らかにしている。

ペインはハートリのこの著作を1837年頃に読んでいる (Bain 1904: 46)。

第2項 トマス・ブラウン

次は, スコットランドの医師・哲学者でエディンバラ大学道徳哲学教授トマス・ブラウン²⁰⁾。1820年に出た『人間の心の哲学に関する講義』は多くの版を重ねた (Brown 1822)²¹⁾。1851年には第19版が出版されているほどである (ディクスンは少なくとも第20版までの存在を確認している)。これは講義録であるが意図的に構成された著作であり, いくつかの講義で感情を扱っている。全部でちょうど100の講義のうち, およそ5分の1である第52-72講義が狭義の感情を扱っている。第73講義以降は倫理学となる。

ブラウンの使う用語は, passion や affection というよりは emotion である。この点が特徴であり, 現在通常使われている意味での emotion という単語が英語圏で浸透したのはこの著作の影響が大きいとディクスンは言う (Dixon 2003: Chap. 4)。なので, ブラウンは確かに「感情」を扱っているのである。

ブラウンによると, 感情は直接的・回顧的・予期的 (immediate, retrospective, prospective) の3つに分けられる。さらに, 直接的感情は道徳感を含まないものと含むもの, 回顧的感情は他者に関するものと自己

に関するもの、予期的感情（これには下位分類がない）に分けられる。

感情		品目	講義
直接的	道徳感を含まない	陽気さと憂鬱 (cheerfulness and melancholy)	LII
		驚き (wonder)	LIII
		倦怠 (languor)	LIII
		美とその反対 (beauty and its opposite)	LIII-LVII
		崇高 (sublimity)	LVII
		嘲笑 (the ludicrous)	LVIII
	道徳感を含む	悪徳と美徳の判明な感じ (feelings distinctive of vice and virtue)	LIX
		愛憎 (love and hate)	LIX-LXI
		同感 (sympathy)	LXI-LXII
		自慢と謙遜 (pride and humility)	LXII
回顧的	他者	怒り (anger)	LXIII
		感謝 (gratitude)	LXIII
	自己	単なる後悔とうれしさ (simple regret and gladness)	LXIV
		自責とその反対 (remorse and its opposite)	LXIV
予期的	～への欲 (desire of)	自己の存在の継続への欲 (our own continued existence)	LXV
		快 (pleasure)	LXVI
		活動 (action)	LXVI
		社交 (society)	LXVII
		知識 (knowledge)	LXVII
		力 (power) 直接的=自己顕示 (ambition)	LXVIII
		力 間接的=貪欲 (avarice)	LXIX-LXX
		他者への愛情 (the affection of others)	LXX
		栄光 (glory)	LXX-LXXI
		他者の幸福 (the happiness of others)	LXXII
		他者への悪意 (evil to others)	LXXII

ブラウンの感情論は、新しい感情論を作り出した人物として近年評価が高まっている²²⁾。バインの心理学は、同時代人によってブラウンの影響を強く受けていると考えられていたし、ディクスンもその影響を確認している (Dixon 2005: Chap. 5)。しかし、バインの『感情と意志』初版では、ブラウンに註の中で1箇所触れているのみである (Bain 1859: 84)。『自伝』でも大学時代にブラウンの『人間の心の哲学に関する講義』を借りた

が「十分に熟読しなかった (did not fully peruse)」と述べるのみである (Bain 1904: 46)²³⁾。この記述の冷淡さはむしろ影響の大きさを隠そうとしている (あるいは意識から消そうとしていた) ことの裏返しかもしれない。第2版の付録における感情の分類例の1つとしてブラウンが挙げられている (Bain 1865: 606)。

第3項 ジェイムズ・ミルとジョン・ステュアート・ミル

そして、ジェイムズ・ミル (James Mill, 1773-1836)²⁴⁾。1829年に出された『人間の心の現象の分析』(Mill, James 1869) と1835年の『マキントシュに関する断章』(Mill, James 1870) がジェイムズ・ミルの心理学的著作である。特に、前者はジョン・ステュアート・ミルとベインらによって1869年に注釈付きで復刻された (Mill, James 1869)。これらのジェイムズ・ミルの著作にはまとまった構造を持つ感情論はない。いくつかの品目については扱われており、ベインも言及している (Bain 1859: 200, 218, 306, 307, 314) が、ハートリやブラウンの著作での感情の重要な扱いに比べるとかなり淡泊に思える。

感情論に対するジェイムズ・ミルの淡泊さは、その功利主義の師匠であるジェレミ・ベンサムに由来するのかもしれない。少なくとも、息子であるジョン・ステュアート・ミルによる、ベンサムとミル父の評価はそうであった。『ベンサム論』ではベンサムの人間理解の弱さ、特に感情への理解のなさを指摘している (Mill, John Stuart 1967: 和訳82-83頁)。さらにその『自伝』では、批判者に同意する形で、功利主義者の感情への評価の低さを確認する (Mill, John Stuart 1873: Chap. 4)。ミル息子自身は「精神的危機」をワーズワスなどの詩情によって乗り越え、第6章で後の妻になるテイラー夫人 (出会った頃はまだ人妻だった) を描写する場面ではしつこいほど感情についての言及がある (Mill, John Stuart 1873: Chap. 6)。

ただし、ベンサムやミル父の功利主義が感情の問題を全く無視していたのではない。功利主義的倫理学があり、倫理学は感情論と深い関わりがあったからである。しかし、本論文では倫理学まで含めた感情論を取り扱える余裕はないので、後の考察に残しておく。

第4項 ドゥーゴールド・ステュワート

次に、ベイン自身が『感情と意志』初版で挙げている著作を見てみよう。著作中でベインが参照しているものは意外に少ない。

まず冒頭に引用があり、それはドゥーゴールド・ステュワート (Dugald Stewart, 1753-1828) の著作からである。ステュワートはエディンバラ生まれでエディンバラ大学道徳哲学教授 (トマス・ブラウンの前任) であり、その講義には前述のトマス・ブラウンやジェイムズ・ミルも出席していた²⁵⁾。ベインは大学時代にステュワートの『アダム・スミス、ウィリアム・ロバートスン、トマス・リードの伝記的備忘録』(1811)を読んでいる (Bain 1904: 44)²⁶⁾。この表題に含まれる人物たちはスコットランド啓蒙を代表する人物で、著者のステュワート自身もその伝統に属する。ベインが引用しているのはステュワートの代表的著作『人間の活動力と道徳力の哲学』(Stewart 1828)である²⁷⁾。

ステュワートはこの著作で活動力の一部として欲とアフェクションを扱っている。第1書「活動についての我々の本能的諸原理について (Of our instinctive principles of action)」の第2章「欲について (Of desires)」には知識・社交・賞賛 (Esteem)・力・競争あるいは優越 (Emulation, Spieriority) が扱われ、トマス・ブラウンの予期的感情における10品目とかなり重なっている。第3章「我々のアフェクションについて (Of our Affections)」では、アフェクションが本義的に善意的なものとされ (その意味ではアフェクションの今日的意味である「愛情」に近い)、親族への

愛・友情・愛郷心・苦しむものへの憐憫 (the Affections of Kindred, Friendship, Patriotism, Pity to the Distressed) が挙げられ、その後でいわゆる悪意的アフェクションとして憎・嫉妬・羨み・復讐・人間憎悪 (Hatred, Jealousy, Envy, Revenge, Misanthropy), まとめて恨 (resentment) や怒り (anger) が説明される。以降は道徳についての議論となる。

第5項 チャールズ・ダーウィン

ペインは、感情の分類に関して化学・博物学の助けを借りるとして、註の中にチャールズ・ダーウィンへの言及 (Bain 1859: 25) をするものの、同年に出た『種の起源』ではもちろん無い (この註は第2版以降は削除される)。

第6項 ウィリアム・ペイリ

次に、ウィリアム・ペイリ (William Paley, 1743-1805)。『自然神学』 (*Natural theology, or, Evidences of the existence and attributes of the deity, collected from the appearances of nature.* 1802) で科学史上著名なペイリは、神学的功利主義者としても知られる。1775年にペイリが出版した『道徳および政治哲学の原理』では功利主義が展開されている (Paley 1799)²⁸⁾。この著作の出版が刺激となって既に1780年には印刷されていたベンサムの初期の主著『道徳および立法の原理序説』(1789) が刊行されたという経緯 (永井 2003: 106-107) は、後のウォレスとダーウィンの関係を思い起こさせるエピソードである。ともかく、ペインがペイリの『道徳および政治哲学の原理』から引用するのは功利主義に関する部分である (Bain 1859: 26, Paley 1799: 22)。ただし、ペイリの『道徳および政治哲学の原理』には感情を扱う個別のセクションはない。

第7項 トマス・チャルマズ

次は、エディンバラ大学神学教授トマス・チャルマズ (Thomas Chalmers, 1780-1847)。ベインはアバディーン大学での学生時代にこの著者の論文を読んでいた (Bain 1904: 58) し、説教にも出席した (Bain 1904: 69)。チャルマズの心の哲学を熱心に学んでいたのである。このチャルマズもトマス・ブラウンの大きな影響を受けていた (Dixon 2003: 127-133)。ブラウン感情論はこのチャルマズを経由してベインに影響を及ぼしたと考えられる (Dixon 2003: 155)。宗教史上ではこのチャルマズは1834年にスコットランド教会から独立した福音主義の自由教会を作ったことで著名である。ここに合流したのが後述のウィリアム・ライアルである。

ベインが『感情と意志』で言及するのはチャルマズの『神の力、叡智、善について』(全2巻, Chalmers 1833)で、いわゆるブリッジウォーター論集の第1篇である²⁹⁾。外界の自然が人間の構成 (constitution) にどのように影響するか、という主題で、道徳的構成と知的構成の2部構成になっている。第1部「道徳的構成への適応」の表題にアフェクションという言葉が使われている。索引がないので数は不明だが、本文中にはかなりの数で emotion という用語の使用も認められる。これは明らかにブラウンの影響であろう。一方、第2部「知的構成への適応」では知性と感情の関係が論じられている (Part II, Chap. II)。その次の章は知性と意志の関係を論じている (Part II, Chap. III)。第2章と第3章で知性、感情、意志 (Intellect, Emotions, Will) の関係が論じられているわけであり、すなわち、ベインの3分割 (知情意) がその順番で見出せる。この点で、チャルマズがベイン心理学に影響を与えたことは充分に考えられる。

第8項 トマス・ホブズ

次は、トマス・ホブズ (Thomas Hobbes, 1588-1679)。ベインは、特

に著作の指定もしないが、笑いについての部分に言及している (Bain 1859: 153³⁰⁾)。おそらくこれは『人間論』(Hobbes 1658)での笑い論を指していると思われる³¹⁾。『人間論』には affectus として、総論に次いで11項目で感情品目が挙げられている (Hobbes 1658, Chap. 12)。むしろベインは『リヴァイアサン (*Leviathan*)』(1651)の方を読んでいたのかもしれない。『リヴァイアサン』ではその第6章でパッション (!) として論じている。それは感情品目についての羅列であり、項目は水田による邦訳の目次に上下2段3頁に渡って列挙されている (Hobbes 1651: 邦訳12-14頁)。その構成はベインのものとは無縁である。

第9項 ウィリアム・ヒューエル

次に、ウィリアム・ヒューエル (William Whewell, 1794-1866)。『道徳性の諸要素、政治形態を含む』(Whewell 1845) が言及されている (Bain 1859: 290-302)。この著作では人間活動を5つの種類 (appetites, affections, mental desires, moral sentiments, reflex sentiments) に分けて論じ、その第2番目以降に感情に相当するものが含まれる。アフエクションには、愛 (love)、怒 (anger)、感謝 (gratitude)、恨 (resentment)、悪意 (malice)、社交 (man in society, intercourse of men) といった対人的なものが含まれ、心的欲には記憶と想像 (memory and imagination)、善・希望・恐れ (good, hope, fear) が含まれる。本能的欲として安心 (safety)、自己保存 (self-preservation)、安全 (security)、自由 (liberty)、所有 (having)、家族と市民社会 (family society, civil society)、相互理解 (mutual understanding)、優越 (superiority)、知識 (knowledge) が含まれる。道徳感覚はそれだけ下位分類が無く、最後の反省感覚の欲には愛されること (being loved)、評価 (esteem)、自己賞賛 (our own approval) がある。

ベインはヒューエルの道徳論を批判していた。ヒューエル感情論も、取

り上げる価値があるとしたらベインは批判していただろう。

第10項 アダム・スミス

最後に、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790)。『道徳感覚の理論』(Smith 1759) は感情全般を扱うものではなく、ベインも道徳感覚論の一例として持ち出しているに過ぎない (Bain 1859: 302)。

第11項 デイヴィッド・ヒューム

意外なことに、ベインの『感情と意志』初版にはスコットランド哲学の偉人であり感情論 (パッション論として) を扱っていたヒュームへの言及が見られない。『感覚と知性』にもない。しかし、ベインは若い頃 (1835 年以前?) にヒュームの『人間本性論』(Hume 1739) を読んでいた (Bain 1904: 30)³²⁾。全3書に分かたれたこの著作の第2書が「パッションについて」である。その第1部「自慢と卑下 (Of pride and humility)」には美醜・貧富・名誉なども含まれ、第2部「愛と憎」には善意と怒り、同情 (compassion)、悪意、それらの混合、愛のパッションが含まれ、第3部「意志と直接的パッション」には、自由と必然性、習慣、強いパッション、好奇心と真理愛が含まれる。「直接的パッション」とは現前する快苦から直接産まれるもので、欲と避、惨と喜、望と恐、および意志作用 (volition) が含まれる (Hume 1739: 438)³³⁾。

第7節 ベインの感情論初版 (1859) の構成と同時代の他の感情論の構成との比較

以上のような感情論の伝統とベインの感情論がどのように伝統を受け継ぎどれほどそれらと異なるのかを見ていこう。

第1項 ベイン『感情と意志』初版（1859）

『感情と意志』初版（1859）での感情論の大まかな目次を以下に挙げる。

第1章 感情一般について

感情の身体的随伴現象

感情の形質（Characters）

厳密あるいは純粹に感情的な形質

感情の意志的形質

感情の知的形質

感情の混合的形質

感情解釈の基準

感情発達管見

第2章 感情の分類

第3章 感情の弁（vent）に付随する感じ

第4章 驚き（Wonder）の感情

第5章 恐怖（Terror）の感情

第6章 優しい感情（Tender emotion）

優しい感情の種類

家族

善意的アフエクション（Benevolent Affections）

悲しみ（Sorrow）

称賛と評価

崇拜 宗教的センチメント

第7章 自己の感情

自己称賛と自尊

賞賛への愛

第8章 力の感情

第9章 怒り感情 (Irascible emotion)

第10章 活動の感情 探求

第11章 知性の感情

単純感情の要約

第12章 同感と模倣 (Sympathy and imitation)

第13章 観念的感情 (Ideal emotion) について

第14章 美的感情 (Aesthetic emotions)

芸術の特殊感情

第15章 倫理的感情；あるいは道德感覚

この目次にある「感情」は全て emotion (s) に対応している。確かに、伝統的感情論の用語であるアフェクション、センチメントの語も使われている。しかし、アフェクションは愛情に近い意味で使われていて、伝統的な意味合いはなく、センチメントは倫理・宗教に結び付けられている点で伝統的な意味に限定されている。

第1章と第2章が総論である。第3章から第6章、第8章、第10章と第11章が単純感情 (simple emotions) とペインが呼ぶものになっている。「自己の感情」と「怒り感情」はより単純な感じに分解される (Bain 1859: 207)。以降の4つの章は単純感情以外、ということになる。この構成は上述のブラウンにも他のペインの挙げる先行文献にも似ていない。しかし、単純感情の後に倫理・道德が続くのはペインまでの伝統的感情論の順番に従っているといえる。ちなみに、『感覚と知性』『感情と意志』の2冊を縮約したペインの教科書『心の科学』では『感情と意志』の第15章に相当する部分が含まれていない（そのかわり別の教科書『道德科学』に含まれる）。

このペイン感情論の構成の特性をより明らかにするために、ほぼ同じ頃に出版された別の著者による2つの感情論の構成比較してみる。

第2項 ジョージ・ラムゼイの感情論（1848）

最初は、スコットランドのグラスゴウ大学教授ジョージ・ラムゼイ（George Ramsay, 1800-1871）の『感情論の分析』（Ramsay 1848）。本文179頁の小著で、美と崇高性、および滑稽な感情についてという2つの小論が大半を占めるので、全般的に感情扱うのは最初の60頁ほどになる。目次に項目はないが、本文中の項目分けに従って感情論の構成を見ていく。

そこでは感情はまず、受動（passive）と能動（active）に分けられる。前者は伝統的な意味でのパッションに相当する。その第1段階には、喜（Joy）とその下位品目である陽気（Cheerfulness）、嘆（Grief）とその下位品目である浮かれ（Mirth）と疲労（Weariness）と倦怠（Ennui）、驚き（Wonder）、美（Beauty）、崇高性（Sublimity）、滑稽な感情（The ludicrous emotions）が含まれる。この受動的感情の第2段階では、直接的（Immediate）と回顧的（Retrospective）に分けられる。これはブラウンを受け継いだ分類（本論文第6節題2項）になる。直接的感情には同感と反感（Sympathy and Antipathy）、自慢と謙遜（Pride and Humility）があり、回顧的感情には後悔（Remorse）、恥辱（Shame）がある。

能動感情は伝統的なアフェクションに相当し、段階としては自己の善に対するものと他者の善に対するものに分けられる。前者の単独あるいは自己関心的能動感情（Solitary or Self-regarding Active Emotions）には、自己顕示（Ambition）、富への欲（Desire of Wealth）、名声等への欲（Desire of Reputation, of Fame, or Glory）、好奇心あるいは知への欲（Curiosity or Desire of Knowledge）、生存への欲（Desire of Life, or of Continued Existence）が含まれる。他者の善に対するものに相当する社会的能動感

情 (Social Active Emotions) はさらに善的と悪的に分けられる。善意感情 (Benevolent Emotions) には、愛 (Love) と憐れみ (Pity) があり、悪意感情 (Malevolent Emotions) には憎 (Hatred) と悪意 (Malice) が含まれる。

スコットランド派の感情論にブラウンを混ぜたような構成であり、一世代前から大きな変更が無いという意味で伝統的感情論だといえるだろう。ベイン感情論の構成とほとんど共通点がない。

第3項 ウィリアム・ライアルの感情論 (1855)

次に、スコットランド出身でカナダで活躍したウィリアム・ライアル (William Lyall, 1811-1890)³⁴⁾ の『知性、感情と道徳的性質』(Lyall 1855)。この著作の第2部に相当する部分が「感情の哲学 (The philosophy of the emotions)」(Lyall 1855: 279-470) となっている。ベインの著作のように細かい節分けがなく、なんとなく該当する箇所の見出しが目次にだけ見られる (それは段落分けとすら一致しない場合が多い)。厳密には構成をつかみにくい、目次を参考にすると以下ようになる。

感情の本性一般

陽気 (Cheerfulness)

陽気の反対としての憂鬱 (Melancholy) いらいら・不機嫌等

喜 (Joy)

喜の反対としての悲 (Sorrow)

歓 (Delight)

驚き (Wonder, Surprise and astonishment)

賞賛 (Admiration)

美と崇高 (The emotion of the beautiful and the sublime)

愛 (Love)

友情 (Friendship)

愛郷心 (Patriotism)

愛の反対としての憎 (Hatred)

怒等 (Anger, resentment, envy, revenge, indignation)

同感 (Sympathy)

人間愛 (Philanthropy)

優しさ等 (Generosity, or kindness, and gratitilde)

欲 (Desire)

我々の性質の感情的部分から道徳的部分への移行 (Transition from the emotional to the moral part of our nature)

ここでも「感情」は emotion (s) に対応している。一般論・各論・道徳への繋がり (『知性、感情と道徳的性質』の第3部が「道徳的性質の哲学」となる) という大枠はペインと共通しているものの、感情品目の枚挙の順番には共通するものがない。欲を扱う部分ではリード、ブラウン、ステュワートを批判的に取り上げている。

これら、ペインとほぼ同時代の他の感情論はブラウンに影響され伝統的な感情論を受け継いでいた。それに対して、ペイン感情論の構成は非常に見通しが良く、単純から複雑なものへと構築的にできていること、その一方で全く伝統を無視するのではなく、大枠ではペイン以外の感情論と構成を同じにしながら、品目の配列に異なるルール (伝統的な能動・受動の区別や対になる感情品目の並列に対して、単純感情から組み上げる構築的なやり方) を持ち込んで独自の感情論を構成していたのである³⁵⁾。

第8節 ベイン感情論構成の段階的变化

『感情と意志』初版での感情論は、見通しの良さと伝統との微妙な違和感によって特徴付けられていた。その後2度に渡って改版された時、その構成はどのように変化しただろうか。

第1項 『感情と意志』第2版（1865）

当時の教科書的な著作の常として、改版をすることをベインは想定していたと思われる。2部作『感覚と知性』『感情と意志』が出そろってから、第2版が出るのはそれぞれ1864年と1865年になった。第2版の感情論はほぼ初版と変わらない。以下に主な目次を挙げる。

第1章 感じ一般

感じの形質

感じの感情的形質

感じの意志的形質

感じの知的形質

感じの混合的形質

感じ解釈の基準

感情発達管見

第2章 感情とその分類

第3章 調和と対立の感情

第4章 相対性の感情

第5章 恐怖の感情

第6章 優しい感情

優しい感情の種類

家族

善意的アフェクション

悲しみ

称賛と評価

崇拜 宗教的センチメント

第7章 自己の感情

自己称賛と自尊

賞賛への愛

第8章 力の感情

第9章 怒り感情

第10章 活動の感情 探求

第11章 知性の感情

単純感情の要約

第12章 同感と模倣

第13章 観念的感情について

第14章 美的感情

芸術の特殊感情

第15章 倫理的感情；あるいは道德感覚

付録B 感情の分類 ハーバート・スペンサ氏の批判と分類；リードの分類；ドゥーゴールド・スチュワート；トマス・ブラウン；W. ハミルトン卿；カント；ヘルベルト；ヴァイツ；ナロウスキ；ヴァント

目立つ変化があったのは次の3点である。(1) 第1章において、初版では「感情 emotion」とされていたものが、第2版では「感じ feeling」に変わっている。これは、「感じ」と「感情」の関係が第2版で変化したことに対応している。(2) 第3章と第4章で、初版のものが差し替えられ

て新しいテーマが加えられている。初版の第3章に相当する部分は第2版では全く削除され、初版第4章は第2版第4章の一部分に改編され吸収された。これは、感情論を品目の列挙から連合の法則によって整理しようとしたバインの方針転換の結果である。(3) 付録Bにおいて他の研究者の感情分類を取り上げたことである。この付録は表題からわかるようにスペンサの批判に應える形になっている。(1)と(2)の変更もスペンサの批判への対応と考えることができる。

スペンサは1860年に『感情と意志』初版への書評を表した (Spencer 1860)。それはバインの著作全体というよりは主に感情論に対する評論になっている。スペンサの主張をまとめると、『バインの感情論には時間軸変化＝進化論がない』ということに尽きる。バインの感情論は現代西洋人(主にイギリス人の中産階級以上)の成人の感情論であって、その自然誌として、事例集としては価値があるが、分類にさしたる根拠がない、とスペンサは指摘する。スペンサは、個体の発達・生物進化・社会進化(文明化)という3つの時間軸変化を考えて始めて、感情分類と分析に根拠が産まれる、と提案するのである。

バインは、スペンサの批判に直接的には付録Bで応えるが、本文の内容も変更している。分類の根拠として連合主義の法則を前面に押し出したことが、それである。それでも、進化論を全面的に受け入れるには至っていない。たとえば、evolutionという言葉は、付録B以外では、「進化仮説の唱道者ならば」現代の文明人の怒り感情を昔の生存競争の名残だという意見を言うだろう、という註のなかでしか使われない (Bain 1865: 133)。おそらく、バインはスペンサの進化思想を理解するのに時間が足りなかったのだろう、あるいはその重要性に気がつかなかったのだろう。それは、後の生物学が進化を取り入れる過程や、今日の進化心理学の状況を見れば、150年前に苦勞したことは十分に理解できる。ちなみに、スペンサの『心

理学の諸原理』はまだ初版（1855、このときは1巻本）のみであった。

1868年にペインが出版した『心の科学』での感情部分（第3書）は、『感情と意志』第2版に準拠して作られている。

第2項 『感情と意志』第3版（1875）

『感情と意志』第2版が出た後に、第3版への準備が始まったものの、1868年に出た『感覚と知性』第3版に間に合わせることはできず、大幅にずれ込んで1875年に刊行された。この間に、感情科学史上重要な著作が出版されることになる。1871年、チャールズ・ダーウィンは進化を人間にまで拡張した『人間の由来（*The descent of man, and selection in relation to sex*）』を、次の1872年に『動物と人間における感情の表出（*The expression of the emotions in man and animals*）』を相次いで刊行した。スペンサも『心理学の諸原理（*The principles of psychology*）』第2版を内容を倍増させて1870年に刊行した。これらによって、ペインも感情論に進化思想を導入せざるをえなくなった。以下に『感情と意志』第3版の主な目次を挙げる。

第1章 感じ一般

感じの身体的随伴

感じの形質

 感じの感情的形質

 感じの意志的形質

 感じの知的形質

 感じの混合的形質

感じ解釈と評価の基準

感じの勃興と沈下

第2章 進化、心に応用されたものとして

進化の遺伝

社会関係の遺伝

第3章 感情とその分類

第4章 相対性の感情

第5章 観念的感情

第6章 同感

第7章 優しい感情

予備的考察

この感情の特性

優しい感情の種類

広い意味での社交性への関心

性

親の感じ

善意アフェクション

感謝 (Gratitude)

悲しみ

称賛と評価

第8章 恐れ (fear) の感情

予備的見解

恐れの特徴

恐怖の種類

第9章 怒り (anger) の感情

怒りの種類

第10章 力の感情

第11章 自己の感情

自己崇拝 (self-worth), 自尊, 自己感謝

賛成, 感嘆, 賞賛 (approbation, admiration, praise)

第12章 知性の感情

第13章 活動の感情 探求

第14章 美的感情

芸術の特殊感情

第15章 倫理的感情;あるいは道徳感覚

付録B 感情の分類 ハーバート・スペンサ; リード; ドゥーゴール
ド・スチュワート; トマス・ブラウン; W. ハミルトン卿; カント;
ヘルベルト; ヴァイツ; ナロウスキ; ヴント; シャドワース・H. ホ
ジスン

初版・第2版と比べて大きく2つの変更が加えられている。(1) 第2章として進化が組み込まれるようになった。内容に独自性はなく、ほとんどスペンサ等の見解を引き写したものであるが、心理学の一般的テキストに進化論が導入された意義は大きい。(2) 感情品目の配列順番に変更がある。これは第3章での感情分類論が大幅に変更されていることによる。細目に入ることはできないが、特に初版・第2版で単純感情ではないとされた「怒り感情 (irascible emotion)」が「怒りの感情 (emotion of anger)」として単純感情に編入されたこと、単純感情群から美的感情と倫理的感情へのブリッジとして挿入されていた同感と観念的感情がもっと前に移動したこと（これは理にかなった変更である）が、構成上の変化を引き起こした。

その一方で、感情品目の分類に重きを置いていた点は初版から変化していない。確かに、進化論は生物種の分類に根拠を与えることができた。しかし、それ以上に生物が現にこうであるという理由や機能についての説明も与えることができ、それが生物学という学問を豊かにしていった。ペイ

ンが感情論に進化論を取り入れても、大まかな構成には変更無かったのだとすれば、バイン感情論はどのような影響を受けたのか、あるいは受けなかったのか、それは内容の詳しい検討を待たなければならない。

第3項 現代の感情心理学の構成

最後に、21世紀初頭日本の感情心理学教科書の構成を比較のために挙げよう。2010年に出た大平英樹編『感情心理学・入門』（大平 2010）の主な構成は以下である。

序 章 感情心理学事始め

第1章 感情の理論

第2章 感情の生物学的基礎

第3章 感情の機能

第4章 感情と進化

第5章 感情と認知

第6章 感情と発達

第7章 感情と言語

第8章 感情と病理

第9章 感情と健康

終 章 今後の課題と展望

バインとの3つの大きな違いは、（1）この教科書では感情品目の枚挙・分類による解説が無いこと、（2）感情論から道徳・倫理への繋がりが無いこと、（3）そのかわり、感情と心身の病理・健康といった主題が取り上げられていること、である。135年の間に、感情に対する関心が博物誌的な分類から、その機能へと移ったことは判明である。

ベイン以前の感情論と同時代の感情論、およびベイン自身の3つの感情論の構成を見てきた。これらを背景としてようやくベイン感情論理解への入り口に立つことができる。

注

- 1) ベイン心理学一般に関する研究では、Cardno 1956; Mischel 1966; Young 1970: Chap. 3; 羽生 1991; 羽生 1992; Rylance 2000: Chap. 5。近年、フランスの科学史学術雑誌 *Revue d'Histoire des Sciences* で2007年に「アレグザンダ・ベイン：心と脳」という特集号が組まれた (Dupont & Forest 2007a; Clauzade 2007; Becquemont 2007; Dupont 2007; Forest 2007; Dupont & Forest 2007b)。他にベインの教育学・レトリックに関する論文も存在する。
- 2) ベインの著作目録に関しては：Bain 1904: 425-435; Dupont & Forest 2007b。
- 3) ベイン心理学と日本との関係については、杉江 2001; Habu 2002; 山鳥 2008。
- 4) 1894年版が入手できなかったので、本論文では1902年のニューヨーク版を参照する。それ以前の版でニューヨーク版はロンドン版と単語綴りが米語風になっている他は変更がなかったので、第4版のニューヨーク版もロンドン版と基本的な違いはないと思われる。
- 5) 本論文では、引用に関して、日本語の旧仮名遣いはなるべく残したが、旧漢字はことわり無く現行の当用漢字の対応するものに直した。
- 6) この野島の評価はフリーゲルの評価をそのまま受けたものだろう。
- 7) *Psychology: The cognitive powers* (1886), *Psychology: The motive powers; emotions, conscience, will* (1887)。
- 8) *The human mind: A textbook of psychology* (2vols., 1892)。
- 9) *Handbook of psychology I: The senses and the intellect; II: Feeling and will* (1891)。人名に James が頻出するのは偶然である (と思う)。
- 10) Alexander Bain, *Mental and moral science. A compendium of psychology and ethics*. (London: Longman, Green and Co., 1868) という著作は *Mental science* と *Moral science* に分割して出版されることがあり、その *Mental science* 部分

の抄訳が『倍因氏心理新説』（全4冊、東京：同盟舎 1882年＝明治15年）として出版された。井上が参照したのは1875年版であり（第1冊緒言）、第3版と思われる。また、ペインと明治日本の知識人との関係については以下、山島 2008: 17-22。

- 11) <http://jsre.wdc-jp.com/>。2012年12月2日確認。
- 12) この passion という用語には17世紀になってまた別の意味が加わった。デカルトの最後の作品では、身体的作用の精神における受動としての意味で passion（フランス語でも同じ綴り）が使われた。ペインに先行するブリテン島の人々にもこのデカルト的な意味での passion が微妙に影響している場合もある。
- 13) 上註10を参照。ちなみに、感情論部分に関しては、第1版から第3版（これが最終版になる）まで変化はない。
- 14) 井上と同じ *Mental science* の全訳が矢島錦藏によって1886年（明治19年）に行われているが、その訳はちょうど感情部分に入る手前で途切れている（『倍因氏心理学』、入手できたコピーには書誌情報が一切含まれていない（表紙、奥付等がない）が、CiNii によると「東京：林繁樹」とある、<http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA37005785>、2012年12月2日確認）。この続きがあるかどうかは不明である。ただ、目次部分だけは全訳されていて、そこからわかるのは、feeling が「感情」、emotion が「情緒」と訳されていることである（目次21頁）。
- 15) 第3版からドイツ心理学への言及は本文から補注部分に移された。第4版では、その後半でジェイムズ・ワード（James Ward, 1843-1925）を取り上げている（具体的な著作は不明）。
- 16) Christian Wolf (1679-1754) と Immanuel Kant (1724-1804)。「忘れられた」ということなので、ペインは特に名前を挙げない。
- 17) ペインは『感覚と知性』初版において、この引用を『クワンの解剖学（*Quain's anatomy*）』第4版（1837）としている（Bain 1855: 8）がこれは誤りで、該当する文章は第5版に現れる。『感覚と知性』第2版と第3版では訂正されて『クワンの基礎解剖学』第6版の該当部分を参照させている（Bain 1864: 8; Bain 1868: 8）。ただ、第4版に至って、シャーピの引用は全く削除された。

- 18) 同じ指摘を山鳥重も行っている（山鳥 2008: 17）。
- 19) 連合主義心理学史についてワレンに触れずにまとめている日本語で読めるものとして、西尾 1981: 55-77。
- 20) 17世紀イングランドの医者で思想家の Thomas Browne (1605-1682) とは全く別人。
- 21) 残念ながら初版（4巻本）が入手できなかったので、1822年に出た3巻本を参照する。
- 22) その再評価の中心にいるのが本論文でしばしば名前が出てくるトマス・ディクスンである。ディクスンは2003年に8巻本の *Life and collected works of Thomas Brown* (Bristol: Thoemmes) を刊行し、2010年には *Thomas Brown: Selected philosophical writings* (Exeter: Imprint Academic) も出版している。
- 23) したがって、ディクスンの記述は誤っている (Dixon 2003: 155)。その直後のディクスンによる指摘（チャルマズを通じてブラウンの影響を受けた）というのが正しいだろう。
- 24) ジェイムズ・ミルの伝記はかつてはベインが書いたもの (*James Mill: A biography*. London: Longmans, Green and Co., 1882) だけだったが、今日では日本語での評伝がある（山下重一『イギリス思想叢書8 ジェイムズ・ミル』東京：研究社 1997）。
- 25) ドゥーゴールド・ステュアートに関して日本語で読めるのは、篠原 1988。
- 26) Dugald Stewart, *Biographical memoirs, of Adam Smith, LL. D., of William Robertson, D. D., and of Thomas Reid, D. D.: Read before the Royal Society of Edinburgh. Now collected into one volume, with some additional notes*. Edinburgh: George Ramsay and Company, 1811。
- 27) 複数の版があり、ベインが正確にどの版を参照したのかは不明。引用箇所が冒頭部分のためどの版でも頁番号が同じである。ここでは初版を参照した。
- 28) ベインがどの版を参照したかは不明なので、入手できた1799年の第12版を参照する。また、この著作に関して日本語で読める研究は、大村 1994。
- 29) チャルマズの著作の正確なタイトルは『神の力、叡智、善について、外的自然を人間の道徳的および知的構成に適用した場合に現れたものとしての』。ブリッジウォーター論集に関しては、松永 1996: 115-149。なお、松永の著作では「チャーマズ」と表記され、題名は『人間の道徳的ならびに知的構成

に対する外的自然の適応』とされている。

- 30) 参照したコピーでは数字の3が欠けている。その他には政治に関するホップズの見解を参照する箇所もある (Bain 1859: 288)。
- 31) ベインがホップズのラテン語原書を読んだかどうかは不明。英語訳にしてもどの版かはわからない (そもそも題名すら挙げていない)。おそらく、ホップズの笑い論についての二次文献を参照しているのだろう。ホップズの笑い論とベインとの関係については, Billig 2005。
- 32) しかし, 1836年にベインが在籍していたアバディーン大学マーシャル・カレッジの図書館でヒュームの『論集』(*Essays*)を借りようとしたら拒否された (Bain 1904: 44)。図書館としてはあるまじき行為である。このエピソードはベイン自伝の編集者にも印象深かったらしく、『自伝』索引の Hume の項目に「*Essays refused*」を入れている (Bain 1904: 442)。
- 33) この節で扱う感情論の中に骨相学の著作も入れるべきかもしれない。ベインは骨相学に親しみ, 1861年出版の『性格の研究について, 骨相学の評価を含む』を出版し, その中で『感情と意志』とは若干異なる感情論が展開されている (*On the study of character, including an estimate of phrenology*. London: Parker, Son, and Bourn, 1861)。これは骨相学中の感情論の影響かもしれない。骨相学とベインの関係については (ただし感情論は扱っていない), Young 1970: Chap. 3; Flesher 1986: 110-116。エディンバラ出身の骨相学者ジョージ・クーム (George Combe, 1788-1858) の主著『人間の構成, 外的対象との関係を考慮して』では, 人間の自然的能力を「感じ」と「知性」に分け, 「感じ」の下位分類として「センチメント」があり, そこに感情の品目が含まれている (*The constitution of man considered in relation to external objects*. Edinburgh: John Anderson jun. and London: Longman & Co., 1828, この著作の第2章第3節, 34-37頁)。クームとこの著作のこの部分に関しては, 吉村 2010: 第1章。ちなみに吉村はクームの著作を全10章としているが, 初版は5章までしかない。おそらく第3版 (1835年刊) から第6-10章が増補されたものと思われる。ベインは1835年頃の思い出としてクームの『人間の構成』が大きな影響を持っていたこと, しかし全面的に支持していたのではなかったと記している (Bain 1904: 27-28)。骨相学とベイン感情論との関係の解明は今後の課題である。

- 34) スコットランドの自由教会の牧師であり、1855年頃はカナダのノヴァ・スコシア州ハリファクスにある自由教会学校の教授だった。ちなみに州名は「新しいスコットランド」の意味。
- 35) ペインとの関係で重要なスペンサの感情論については別論で改めて論じる予定である。

参 考 文 献

一次文献

- Bain, Alexander 1904, *Autobiography*. London: John W. Parker and Son
- Bain, Alexander 1859, *The emotions and the will*. London: John W. Parker and Son
- Bain, Alexander 1865, *The emotions and the will*. 2nd ed. London: Longmans Green, and Co.
- Bain, Alexander 1875, *The emotions and the will*. 3rd ed. London: Longmans Green, and Co.
- Bain, Alexander 1899, *The emotions and the will*. 4th ed. London: Longmans Green, and Co.
- Bain, Alexander 1855, *The senses and the intellect*. London: John W. Parker and Son
- Bain, Alexander 1864, *The senses and the intellect*. 2nd ed. London: Longman, Green, Longman, Roberts, and Green
- Bain, Alexander 1868, *The senses and the intellect*. 3rd ed. London: Longmans, Green, and Co.
- Bain, Alexander 1902, *The senses and the intellect*. 4th ed. New York: D. Appleton and Company
- Brown, Thomas 1822, *Lectures on the philosophy of the human mind*. In 3vols. Andover: Mark Newman
- Chalmers, Thomas 1833, *On the power wisdom and goodness of god as manifested in the adaptation of external nature to the moral and intellectual constitution of man*. In 2vols. London: William Pickering
- Hartley, David 1749, *Observations on man, his frame, his duty, and his expectations*. (1749) *Two Volumes in One: Facsimile reproduction with an introduction by*

- Theodore L. Huguelet*. Gainesville, Florida: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1966
- Hobbes, Thomas 1651, *Leviathan or the matter, forme, & power, of a common-wealth ecclesiasticall and civill*. London: Andrew Crooke (水田洋 訳『リヴァイアサン』全4巻 東京: 岩波書店 1954-1985)
- Hobbes, Thomas 1658, *Elementorum philosophiae sectio secunda de homine*. Londini: Andr. Crooke (本田裕志 訳『人間論』 京都: 京都大学学術出版会 2012)
- Hume, David 1739, *A treatise of human nature: Being an attempt to indroduce the experimental method of reasoning into moral subjects. Book II. Of the passions*. London: John Noon (大槻春彦 訳『人性論 (三) 第二篇 情緒に就いて』 東京: 岩波書店 1951)
- Lyall, William 1855, *Intellect, the emotions, and the moral nature*. Edinburgh: Thomas Constable and Co.; London: Hamilton, Adams, and Co.
- McCosh, James 1882, *Psychology: The motive powers: Emotions, conscience, will*. New York: Charles Scribner's Sons
- Mill, James 1869, *Analysis of the phenomena of the human mind: A new edition with notes illustrative and critical by Alexander Bain, Andrew Findlater, and George Grote: Edited withe additional notes by John Stuart Mill*. In two volumes. London: Longmans Green Reader and Dyer
- Mill, John Stuart 1873, *Autobiography*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer (山下重一 訳註『評註ミル自伝』 東京: 御茶の水書房 2003)
- Mill, John Stuart 1967, *Mill on Bentham and Coleridge with an introduction by F. R. Leavis*. London: Chatto & Windus (松本啓 訳『ベンサムとコウルリッジ F. R. リーヴィス序文』 東京: みすず書房 1990)
- Paley, William 1799, *The principles of moral and political philosophy*. The 12th ed. London: R. Faulder
- Quain, Richard, & Sharpey, William (eds.) 1848, *Elements of anatomy, by Jones Quain, M. D.* fifth edition. In two volumes. London: taylor, Walton, and Maberly
- Ramsay, George 1848, *Analysis and theory of the emotions with dissertations on beauty sublimity and the ludicrous*. Edinburgh: Adam and Charles Black; London: Longman, Brown, Green, and Longmans
- Smith, Adam 1759, *The theory of moral sentiments*. London: A. Millar; Edinburgh:

- A. Kincaid and J. Bell (水田洋 訳『道徳感情論』全2巻 東京：岩波書店 2003)
- Spencer, Herbert 1860, “Bain on The emotions and the will”, in *Essays: Scientific, political, & speculative*. Vol. 1 (London: Williams & Norgate, 1891), pp. 241-246 (First published in *The Medico-Chirurgical Review* for January, 1860)
- Stewart, Dugald 1828, *The philosophy of the active and moral powers of man*. In 2 vols. Edinburgh: Adam Black; London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green
- Whewell, William 1845, *The elements of morality, including polity*. In 2 vols. London: John W. Parker

二次文献

- Becquemont, Daniel 2007, “Les réticences de Bain face à la théorie des localisations cérébrales de Jackson et de Ferrier”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 281-301
- Benjafield, John G. 2010, *A history of psychology*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press
- Billig, Michael 2005, *Laughter and ridicule: towards a social critique of humour*. London: Sage (鈴木聡志 訳『笑いと嘲り ユーモアのダークサイド』 東京：新曜社 2011)
- Cardno, J. A. 1956, “Bain and physiological psychology”, *Australian Journal of Psychology*, **7**: 108-120
- Chung, Man Cheung, & Hyland, Michael E. 2012, *History and philosophy of psychology*. Chichester: Wiley-Blackwell
- Clauzade, Laurent 2007, “De la science de l'esprit à l'étude du caractère: Alexander Bain et la psychologie des différences individuelles”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 303-325
- Dixon, Thomas 1999, “Theology, anti-theology and atheology: From christian passions to secular emotions”, *Modern Theology*, **15**(3): 297-330
- Dixon, Thomas 2001, “The psychology of the emotions in Britain and American in the Nineteenth century: The role of religious and antireligious commitments”,

Osiris, **16** : 288-320

Dixon, Thomas 2003, *From passions to emotions: The creation of a secular psychological category*. Cambridge: Cambridge University Press

Dupont, Jean-Claude 2007, “Sources et implications physiologiques du discours psychologique chez Bain”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 327-356

Dupont, Jean-Claude, & Forest, Denis 2007a, “Alexander Bain (1818-1903): L'esprit et le cerveau”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 277-279

Dupont, Jean-Claude, & Denis, Forest 2007b, “Indications bio-bibliographiques sur Alexander Bain (1818-1903)”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 277-279

Flesher, Mary Mosher 1986, “Human nature surpassing itself: An intellectual biography of the early life and work of Alexander Bain (1818-1903)”, A dissertation presented to the Graduate Committee of Lehigh University

Flugel, J. C., & West, Donald J. 1964, *A hundred years of psychology 1833-1933: Part V: 1933-1963 revised by Donald J. West*. London: Gearld Duckworth

Forest, Denis 2007, “Bain et les théories centralistes de l'action et de la conscience d'agir”, *Revue d'Histoire des Sciences*, **60**(2): 357-374

藤波尚美 2009, 『ウィリアム・ジェームズと心理学 現代心理学の源流』 東京：勁草書房

Gardiner, H. M., Metcalf, Ruth Clark, & Beebe-Center, John G. 1937, *Feeling and emotion: A history of theories*. New York: American Book Company (矢田部達郎・秋重義治 訳 『感情心理学史』 東京：理想社 1964)

Greenwood, John D. 2009, *A conceptual history of psychology*. New York: McGraw-Hill

Goodwin, C. James 2012, *A history of modern psychology*. 4th ed. Hoboken: John Wiley and Sons

羽生義正 1991, 「連合理論再考 (1) : A.BAIN の有意動作発生論について」, 『広島大学教育学部紀要』, **39** : 127-135

羽生義正 1992, 「連合理論再考 (2) : A.BAIN の認識作用発生論について」, 『広島大学教育学部紀要』, **41** : 117-122

Habu, Yoshimasa 2001, “Alexander Bain's empirical psychology as introduced to Japan of the new age (Meiji era)”, 『徳島文理大学紀要』, **61** : 31-41

- Habu, Yoshimasa 2002, “Academic life of Alexander Bain: Integration of ideas towards modern psychology”, 『広島文教女子大学紀要』, 37: 135-143
- 今田恵 1962, 『心理学史』 東京: 岩波書店
- 井上哲次郎 1881, 『哲学字彙』 東京: 東京大学三学部 (復刻版, 東京: 名著普及会 1980)
- 井上哲次郎・有賀長雄 1884, 『改訂増補哲学字彙』 東京: 東洋館 (復刻版, 東京: 名著普及会 1980)
- 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃 編, 2011, 『心理学 第4版』 東京: 東京大学出版会
- Leahey, Thoma Hardy, 1980, *A history of psychology: Main currents in psychological thought*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall (宇津木保 訳 『心理学史 心理学的思想の主要な潮流』 東京: 誠信書房, 1986)
- 松本亦太郎 1937, 『心理学史』 東京: 改造社
- 松永俊男 1996, 『ダーウィンの時代 科学と宗教』 名古屋: 名古屋大学出版会
- Mischel, Theodore 1966, “‘Emotion’ and ‘motivation’ in the development of English psychology: D. Hartley, James Mill, A. Bain”, *Journal of the History of Behavioral Sciences*, 2: 123-144
- Murray, David J. 1983, *A history of Western psychology*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall
- 永井義雄 2003, 『イギリス思想叢書 7 ベンサム』 東京: 研究社
- 西川泰夫・高砂美樹 2010, 『改訂版 心理学史』, 東京: 日本放送出版
- 西尾孝司 1981, 『増訂イギリス功利主義の政治思想』 東京: 八千代出版
- 野島忠太郎 1937, 『心理学発達史』 東京: 大都書房
- Oatley, Keith 2009, *Emotions: A brief history*. Malden: Blackwell
- 大平英樹 編 2010, 『感情心理学・入門』 東京: 有斐閣
- 大村照夫 1994, 『ウィリアム・ペイラー研究』 京都: 晃洋書房
- Pickren, Wade E., & Rutherford, Alexandra, 2010, *A history of modern psychology in context*. Hoboken: John Wiley and Sons
- Rylance, Rick, 2000, *Victorian psychology and British culture 1850-1880*. Oxford: Oxford University Press

- 篠原久 1988, 「ドゥーガルド・ステュアートの道徳哲学 「自然法学」と「政治学」をめぐる」, 田中正司 編著 『スコットランド啓蒙思想研究』(東京: 北樹出版 1988), 204-227
- Shiraev, Eric 2011, *A history of psychology: A global perspective*. Los Angeles: Sage
- 杉江藍 2001, 「明治期日本における心理学の導入と「感情」理解 井上哲次郎 抄訳『倍因氏心理新説』を中心に」, 『中国四国教育学会 教育学研究紀要』, 47: 120-124
- Thomson, Robert 1968, *The Perican history of psychology*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books (北村晴朗 監訳 『心理学の歴史』 東京: 北望社 1969)
- Warren, Howard C. 1921, *A history of the association psychology*. New York: Charles Scribner's Son (矢田部達郎 訳 『心理学史』 東京: 創元社 1951)
- 山鳥重 2008, 『知・情・意の神経心理学』 東京: 青灯社
- 吉村正和 2010, 『心霊の文化史 スピリチュアルな英国近代』 東京: 河出書房新社
- Young, Robert M. 1970, *Mind, brain and adaptation in the nineteenth century: Cerebral localization and its biological context from Gall to Ferrier*. Oxford: Oxford University Press

The Construction of Alexander Bain's Theory of Emotion

HONMA Eio

In this paper I examine the special features of the construction of Alexander Bain's theory of emotion by comparing it with other theories prevalent before the mid-nineteenth century.

In Section 1, I outline Bain's life and the history of the publication of his well-known textbook *The Emotion and the Will*. In Sections 2 and 3, I consider the varying estimations of Bain's work (especially his theory of emotion) in the history of psychology.

In Section 4, I discuss the Japanese translations of words related to emotion, and in Section 5, I clarify the origin of Bain's three divisions of the mind and the influence of his theory in Japan.

From Section 6 to 9, finally, I examine the construction of the part of emotion in psychology books written during Bain's day and before.